

Teaching Portfolio

「白雪姫」と
「アナと雪の女王」からみる
女性の幸せのカタチ



一木 順

筑紫女学園大学文学部英語メディア学科

第12回佐賀大学・第1回福岡工業大学
ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ

作成日 2015年3月8日～10日
作成場所 FIT セミナーハウス@湯布院

目次

1. 本学における私の責任
 - 1-1. 教育にかかわる責任
 - 1-2. 教務部長としての責任
2. 本学教育の理念と目的
 - 2-1. 本学の使命
 - 2-2. 英語メディア学科の教育目標
 - 2-3. 私の教育理念と目標
 - 2-4. 私の担当科目の概要とその目標
 - 2-4-1. 映画メディア研究の概要と目的
 - 2-4-2. シネマ英語の概要と目的
 - 2-4-3. 卒業ゼミナール I、II の概要と目的
 - 2-5. 授業外学習時間増加への取り組み
3. 方法
 - 3-1 大学の学びを学外に開いていくための方法
 - (a) 調べ学習の導入
 - (b) ボーナス課題の提示
 - 3-2 主体的な学びの実践のための方法
 - (a) 授業用スライドの編集と電子ファイル化
 - (b) 学生による試験問題の作成
 - (c) 学生の意見の LMS による聴取と掲示
 - 3-3 他者との協働作業を促進するための方法
 - (a) グループワークやペアワークの実践
 - (b) コメンテーター制度
 - (c) 相互評価
 - 3-4 授業外学習時間増加のための方法
 - (a) 授業外学習の点数化
 - (b) LMS を活用した自習教材の配布
 - (c) 予習課題、復習課題の電子書籍化
4. 学習成果
5. 今後の目標

1. 本学における私の責任

私の本学教員としての責任は大きく「教育」にかかわるもの、「教育管理職」にかかわるもの、「研究」にかかわるもの、そして「社会貢献」にかかわるものがある。この項では私の本学における責任範囲ならびにその中で教育の位置づけについて述べる。

1-1. 教育に関する責任

私は現在本学の教務部長を務めていることから、本学教員の基準コマ数が年間 12 コマであるのに対し、教育管理者として年間に 6 コマと軽減されている。その中で私が担当している授業は以下のとおりである。

科目名称	開講年次と学期	単位種別	受講人数	コマ数
映画メディア研究	3 年前期	必修選択	30～50 名	2
卒業ゼミナール I	4 年前期	必修	10 名程度	1
シネマ英語	3 年後期	必修選択	20～60 名	2
卒業ゼミナール II	4 年後期	必修	10 名程度	1

これとは別に兼任教員として担当している科目は以下のとおりである。

科目名称	担当教育機関	学期	受講人数	コマ数
研究基礎	筑紫女学園大学大学院	前期	1～2 名	1
Hakata Studies I	福岡女子大学	前期	30 名程度	2
Japanese Society through Popular Culture	福岡女子大学	前期	4～5 名	1
英米文化特講	筑紫女学園大学大学院	後期	1～2 名	1
Hakata Studies II	福岡女子大学	後期	30 名程度	2
Japan through Historical Tales	福岡女子大学	後期	4～5 名	1

1-2. 教務部長としての責任

量的には私の教育に関する義務はほかの教員よりも低いと考えられるが、私は教務部長として全学的なカリキュラム運営を行う責任を負っている。平成25年度には平成27年度からのカリキュラム改訂に伴って体系性を重視した下降的カリキュラムを提案し、複数回の会議の結果導入することができた。また教育開発や授業改善の指針作りも部長としての責務の一環である。平成26年度に私は8回教育開発関連の研究会やフォーラムに参加するための出張を行った。私はこれまでに参加した様々な研修会などで得た知見を本学教育の改善ならびに自らの授業へ反映させようと試みている。

中でも本学喫緊の課題と考えられるのは、授業学習時間の少なさである。本学では平成 25 年度より授業評価アンケートをウェブ化した。その際に学生の授業外学習時間を、それまでの「よく行った」「すこし行った」「あまり行っていない」「まったく行っていない」といったものから、「0時間」「1時間未満」「1～2時間」「2～3時間」「それ以上」と具体的な時間数を問うものに改めた。その結果本学学生の8割以上が1時間未満の授業外学習しか行っていない実態が明らかになった。(資料1)いうまでもなく授業外学習は大学設置基準において求められているものであり、本学としてもその改善を目指した取り組みを行ってきた。平成 26

年度より教務部および教育開発センターの共同事業として授業外学習時間増加への取り組みを行っているが、私は自身の授業を授業外学習促進のための授業モデルとして提示するための実践を行っている。その意味では教育にかかわるエフォートと教育管理職としてのエフォートは不可分であるというのが私の考えである。

2. 教育の理念と目的

この項では本学教育における理念と目的からの私の個々の授業の位置づけを述べる。

2-1. 本学の使命と教育理念

仏教系の中規模女子大学である本学は、「自律・和平・感恩」という建学の精神の下、「いのちへの目覚め」と「社会の中で自己実現できる人の育成」をその社会的使命として太宰府・福岡地域で100年以上の歴史を重ねてきた。その本学の使命を私なりに解釈すれば、他者との協働の中で(和平)、自分の役目を発見し、主体的にその役目を果たす(自律)ことで、社会に貢献する(感恩)人材の育成ということになる。

2-2. 文学部英語メディア学科の教育目標

私が所属する文学部英語メディア学科は「国際化・情報化社会のニーズに対応するため、英語・情報・メディアの能力を身につける」ために以下の3つの目標を挙げている。

- (1) 実践的な英語能力を有し、深い異文化理解をもって国際社会で活躍できる女性の育成
- (2) 情報化社会に対応するメディアリテラシーを備えた女性の育成
- (3) 時代に即応できる技能をもって活躍する女性の育成

2-3. 私の教育理念と目標

改めて振り返ると22年に渡る本学での教員生活の中で自らの教育理念を学科の、そして大学の教育理念との関連で考えたことはなかった。各科目は学科のDPを、そして各学科は大学のDPを達成するために体系づけられているという私の持論からいえば、私の教育もまた大学の、そして学科の教育目標に資するものでなければならないはずである。私はポピュラー文化研究、文化表象研究を専門とする研究者であり、それゆえに私が担当している科目は映画やマンガ、アニメやドラマといったポピュラー文化を題材にとるものが中心である。私はそうした学生たちが日常的に親しんでいる、そして大学の授業と関連付けて考えようとはしない題材を積極的に教育に取り入れることで、

学生たちの学びを大学という場や時期に限定せず、これからの人生の中で自分の周囲にある題材を自分自身で設定した目的の達成のために適切に利用しながら新たな技能習得や深い社会理解につなげる視点と主体性を持った人材の育成

という私自身の教育目的を実現したいと考えている。

私のこうした教育の理想は社会で有為な人材足りうるためには、動的かつ主体的な自己確立が必要であるという私の社会観に基づいている。社会では多様なロールが割り当てられ、そのロールに付帯する義務を果たすことが社会人の責務とされる。そうした状況の中で最大限の自己表現を行うためには、状況に応じて変化しうる柔軟性とどんな状況でも確立した自己を保持できる主体性という一見相反する二つの要素が必要である。それを同時に身につけるには、常に新しいものを取り入れ続け自己を刷新し続ける力、

すなわち学び続ける力、と他者との関係の中で互恵的な関係を築きつつも確固たる自己主張を行うことができる力、すなわち他者を通じた自己確立、の二つを身につけることが必要と考えるのである。そうした力を学生に身に着けさせることは高等教育機関の教育者としての私の責務であり、それが私の教育理念の基盤である。

同時に私自身の教育目標は、情報を主体的に判断できるリテラシーを持つ女性の育成という学科の教育目標、他者との関連の中で自己研さんを行い、社会の中で自己実現できる人材の育成という本学の使命に十分資するもの足りうると自負している。以下に私の教育目的が、それぞれの科目の中でどのように発現しているかを科目の概要とともに詳述する。

2-4. 私の担当科目の概要と目的

2-4-1. 映画メディア研究(資料1)

この科目は19世紀末に始まるアメリカ映画史をアメリカ史全体と関連付けながら、どのような社会状況がどのような映画的な欲望、ジャンル、技術を生んできたのかを概観する科目であり、その到達目標として

- ① 19世紀から現在にいたるまでアメリカ映画がどのように変遷してきたのかを、アメリカ史全体を俯瞰しながら説明できる
 - ② 映画に関わる「cinema」「movie」「film」という言葉の違いについて説明できる
 - ③ 基礎的な「映像文法」を利用して映像分析を行うことができる
- を挙げている。

この授業において私が学生に要求していること、ひいては授業受講を通して達成してもらいたいと考えているのは以下の2点である。

(1) 既習の世界史的知識を映画史の文脈で再構成すること

映画というメディアは19世紀以降の現代史と深くかかわりながら発展してきた。その関係性を明らかにし、世界史という「学校内知識」と映画という「学校外興味」との連環を発見させることでより深い興味の掘り起し、大学での学びを教育の場の外に広げていく契機としたいと考える。

(2) 「娯楽」の持つ社会性、政治性に気づき、娯楽への主体的な視点を養うこと

たとえばルイ・アルチュセールが明らかにしたように、映画を含むポピュラー文化は国家のイデオロギー装置としての側面を持っている。そうした「娯楽」の持つ政治性や社会性への目覚めを促すことで、より主体的、批判的に文化を考える視座を身につけさせたいと考える。

2-4-2. シネマ英語(資料2)

この科目はさまざまな映画を題材として語彙の習得およびリスニングの練習を行いながら、世界中で数十億人によって公用言語として使用されている英語の多様性を理解するための科目であり、到達目標として

- ① アメリカ、イギリス、オセアニアなど世界各地で用いられる英語の語法上の違いについて説明できる
- ② 映画の中で使われるさまざまな英語表現を聞きとることができる
- ③ 映画を教材としながら英語を発話するリズムを身につけることができる
- ④ 言語と文化、社会の関係について説明できる

を挙げている。

到達目標に明らかなように、この授業の主眼は「英語運用能力の向上」ではない。本学学生のほとんどにとって英語は初修言語ではないし、また 3 年次後期の開講科目でもあることから、この授業では基本的な英語運用能力を持った学生が受講することを想定したうえで、実際の英語運用において想定される様々な問題に対応できる知識を授与することを意識している。この授業の中で私が学生に要求しているのは次の 2 点である。

(1) 「英語」の多様性に気づき、より実践的な言語観を身につけること

本来英語は「英語」という単一の言語ではなく、地域や時代、性別や人種といった要素から生まれる多様性を含んだ言語である。しかし多くの日本人英語学習者はそうした多様性を意識せず、単一の英語のあり方をモデルとして英語学習を行い、結果的に英語習得を困難なものにしていると考えられる。映画は多様な英語に簡単に触れることのできるメディアであり、それを通して言語をより柔軟にとらえる意識を身につけてもらいたい。

(2) 英語学習教材としての映画の利用法を学び、大学の外での英語学習に資すること

映画はほとんどの学生にとって容易に利用でき、また抵抗なく接することのできるメディアである。映画を英語学習のリソースとして活用する方法を学ぶことで、自分自身でも英語学習を続けていける可能性を提示したい。

2-4-3. 卒業ゼミナール I、II(資料 3)

この科目は 4 年間の集大成として、学生がふだん親しんでいるポピュラー文化の中から、各自で問いを発見し、その問いに対する答えを導くための資料を集め、分析し、説得力のある議論を組み立てる。その過程でディスカッションやグループワークを通して、自己理解のための他者の重要性に気づくことを重視している。到達目標としては、

- ① 自分が普段親しんでいるポピュラーメディア(映画、まんが、音楽、テレビなど)の中から自分で問題を発見することができる。
- ② その問題について、先行研究、参考文献の検索、フィールドワーク、インタビュー、アンケートの実施などの調査を行うことができる。
- ③ 調査結果を文章にまとめて、その問題について自分の言葉で語るすることができる。
- ④ 問題提起・研究経過・分析解釈を短時間で要約し、口頭発表し、質疑応答に答えて対話することができる

を挙げている。

この授業は演習でもあり、最も重視されるのは学生の主体的な学習活動である。全受講生は卒業研究を行うことを義務付けられ、そのための題材発見、リサーチクエスチョンの設定、その問いに答えるための資料収集、その題材を使った議論の組み立て、そして 20 分間のプレゼンテーションとして行われる卒業発表まで学生は定められたスケジュールの中で所定の作業を達成することを繰り返す。その中で意図されていることは以下の二点である。

(1) 自律的な行動モラルの獲得

決まった段階での成果という「結果」だけを要求されることで、学生には自身のスケジュールを自分で管理し、自律的に行動するための意識を身につけてもらいたい。

(2) 自己理解のための他者発見

人間が社会的存在として他者との協働の中でしか生きられないことから、他者との協働の中で自分を定位し、他者の存在を自己理解、自己実現のために活用するという体験を与えたいと考える。そのためには場面や目的に応じた最適な役割を発見し、その役割を主体的に演じることができることが望ましいが、全員の卒業発表に様々な立場でかかわることでそうした体験を持たせたい。

以上、3つの科目について、その概要と目的について述べてきたが、改めて私が自身の教育を通して養成したい人材像をまとめると以下になるだろう。

1. 大学での学びを4年間の大学の教室内だけで完結させるのではなく、自身の持つ多様な知と連動させることでより深い社会理解やより有用な知識を獲得できる人材。
2. 他者との協働の中で主体的、自律的な学びを行い、自己実現を達成できる人材。

2-5. 授業外学習時間増加への取り組み

すでに述べたように、現在私は全学的な授業外学習時間の増加に取り組んでいる。それは教務部長としての職責に関わるものであることも事実であるが、同時に私の教育上の理想と深くかかわったものでもある。授業外学習とは限られた授業時間から学びを開放し学外に向けて開くものであると同時に、学びの時間を最大限に活用するための準備であり、振り返りであるにとらえれば、より主体的な姿勢で学びに向かうためのものでもある。大学を超えたステージで行われる主体的な学びは私が理想とするものであり、その意味でも私にとって必須の課題といえることができる。そこで、特に映画メディア研究とシネマ英語において授業外学習時間の増加につながるような取り組みを授業に取り入れることを意図している。

3. 方法

この項では、上述した教育理念の達成のために行っている、個々の授業の中で行っている具体的な方策について述べる。

3-1. 大学の学びを学外に開いていくための方法

(a) 調べ学習の導入

映画メディア研究において、授業で扱う時代での歴史的な出来事についてこれまでの学習をもとに調べることを課題として義務付けている。(資料 5)方法としては「1900年代初頭のアメリカ社会について」という記述型のものや、こちらで写真などを提示し、その人物や出来事について調べるという形式のものなどがある。通常はA4用紙1枚程度にまとめて持ってくることを義務付けている。多くの学生はWikipediaなどを利用して課題を行うが、中には高校の時に用いた教科書などを参考文献にするものもあり、大学での学びと学外での学びや経験を連携させるきっかけになっていると考えられる。

(b) ボーナス課題の提示

映画メディア研究およびシネマ英語において実践している。授業で教授した方法論を使って、学生は自身が選択した映画についてレポートを作成する。映画メディア研究であれば「映画を見ての感想を映像の分析を使いながら書き、どのような映像の構造が自身の感情を生み出したのかを省察させることにした。(資料 6)シネマ英語であれば自身が選んだ映画について、(1)映画の基本情

報(製作者、制作年、映画のレーティングなど)を調べる、(2)日本語字幕の表現と英語のセリフの間のずれを見つける、(3)自分が聞き取れなかった英語表現について調べる、(4)映画の感想を書き、その中に映画の中で使われている英語についての印象や分析を含める、を書かせるようにしている。これらは全員に課せられた課題ではなく、あくまでも授業後に希望者がさらに理解を深めるための課題として提示したが、多くの学生が自分で映画を選択し、それについて独自の考察を行ったレポートを提出した(資料 7)。

3-2. 主体的な学びの実践

(a) 授業用スライドの編集と電子ファイル化

授業でパワーポイントを活用するようになって以降、学生から授業用のスライドを要望されることが多くなった。以前はスライドを印刷したものを授業資料として全員に配布していたが、授業用のスライドを持っているという安心感からか授業内でノートを取らなくなったり、授業態度が散漫になったりするものも見受けられた。そこでシネマ英語の講義において、授業用のスライドは事前に電子ファイルとして本学の LMS に掲示することとし、学生にはそのファイルが必要と思うものだけ印刷するように指示をした。授業用の教材を自らの意志で選択し、準備するという姿勢を身につけさせることを意図したものである。

それだけでなく、掲示用のファイルはあらかじめ編集し、授業でポイントとして確認するところは空白にすることにした。さらに(資料 8)授業ではペンタブレットを使って、スライドにはない情報を手書きで付け加えることとした。こうした活動によって、授業中の集中力を途切れさせないように意図をした。

(b) 学生による試験問題の作成

平成 25 年の映画メディア研究では、毎回の授業の最後に学生に「その日学んだ内容について試験問題を 1 題作成すること」を指示した。それらの問題をストックして、学期末の定期試験問題の中で 20 点分として出題した。(資料 9)これは帝京大学のゲーリー土持先生の方法を踏襲したものだが、「自分の問題が出されるかもしれない」という期待感や「何か問題を作らなければならない」という義務感から学生の受講態度をより積極的なものにするのを意図した。

(c) 学生の意見の LMS での聴取と掲示

平成 26 年の映画メディア研究では授業内で行ったグループディスカッションや個別の意見の聴取に部分的にはあるが本学 LMS を利用した。学生は自分たちのスマホや PC から LMS 上のアンケートサイトにアクセスし、自分(たち)の意見を送る。それがリアルタイムで授業内で示され、全員で共有した後に更なる意見聴取やディスカッションを行った。本学では授業内で挙手による意見聴取を行っても積極的に意見を述べる学生は多くはない。その一方で、SNS などを日常的に活用している多くの学生は短文で自分の意見などを述べることへの抵抗感はすくないことに着目し、こうした方法を導入した。

3-3. 他者との協働作業

(a) グループ学習やペアワークの実践

映画メディア研究及び卒業ゼミナールの授業の中で授業内でのグループ学習やペアワークを大

幅に取り入れた。映画メディア研究では授業前課題の確認と共有、課題として視聴した映画についての意見聴取をグループで行った。大体グループによる活動時間は10分程度とし、その間はいろいろなグループを回って議論のファシリテートを行った。また特にリーダーなどは決めなかったが、グループ学習の後で必ずグループとしての意見を発表するようにした。他者と協働作業を行うことで異なる視点への気づきを得ることや、「ほかの人がやってきていることを自分がやっていないこと」への罪悪感、グループの意見をまとめるためのリーダーシップの自発的発露などの効果を期待した。

(b) コメンテーター制度

卒業ゼミナールの中で学生は卒業発表を行う(20分の発表と10分間の質疑応答)。その際にそれぞれの発表者にコメンテーターをつけるようにした。(資料10)コメンテーターは内容的に同じ / 近い内容の研究を行っているものから指名し、(1)発表内容の要約、(2)ディスカッションのきっかけとなる質問の提示を義務付けた。(資料11)発表者とコメンテーターには授業内外でペアワークを行い、その中で発表者には「コメンテーターを使って自分の発表のポイントを再提示すること」「聞いてもらいたい質問や聞かれない質問を二人で検討し想定問答集を作っておくこと」を指導した。またコメンテーターには「発表者の話の分からないところを明確化する手助けをすること」「それをどうすれば改善できるかをアドバイスすること」を指導した。これによって、他者との協働作業の中で自分の卒業研究を進めることを実感させることを意図した。

(c) 相互評価

卒業ゼミナールの発表においては相互評価を義務付けた。評価者用の用紙を準備し、発表についての5段階評価のほかに「自分が聞いた内容の要約」「特によかったと思うところ」「コメントや質問」の項目について記入させた。(資料12)「発表の要約」を書かせることで、自分が発表した(=伝えたと思っている)内容と他者が聞いた内容が必ずしも一致するのではないことを発表者に理解させると同時に、聞き手には相手の改善につながる建設的な評価者としての視点を持つことを期待して「悪かったところ」などは記載させなかった。

3-4. 授業外学習の促進

(a) 授業外学習の点数化

授業外学習を促進するため、授業外学習分を授業評価点の一部であることをシラバスなどで学生に明示した。(資料1)またシネマ英語においては、授業外学習として行った学習成果をミニテストによって評価の対象とした。内容は授業前課題プリントを行っていればある程度解答可能なものとしたほか、「問題にはされなかったが、自分が予習として行った内容」を記述する欄を作り別途加点した。(資料13)

(b) LMS を活用した自習教材の配布

シネマ英語においては、あらかじめ指定した映画についての自習用教材を作成している。その中には(1)映画の基本情報、(2)映画に関連して調べられるべき語彙10個程度、(3)映画のスク립トの聞き取り問題、(4)映画に関連する英作文課題、などが記載されている。これまでは授業内で30分程度時間を取りそれに基づいて授業を行ってきたが、平成26年からその課題を授業前課題としてLMS上に動画とともに掲示し、学生が自主的にその課題を行う形式に変更した。

(c) 予習課題、復習課題の電子書籍化

平成 26 年度の映画メディア研究においては、予習課題、復習課題を電子書籍化した。予習課題はだいたい動画の視聴も含めて 10 分程度で行えるものとし、希望すればそれらを家でレポートとして作成し、提出できるようにした。本学 LMS 上に掲示されたそれらのファイルをスマホなどでダウンロードすることで、受講生は移動中やちょっとした休み時間でも授業前課題を視聴することができるようになり、それによって授業前課題への負担感をできるだけ下げることがを意図した。

4. 学習成果

この項では、上述の方法がどのような成果を生んだのかについて述べる。

4-1. 大学の学びを学外に開いていくための方法

(a) 調べ学習の導入

映画メディア研究では授業前課題として指定した調べ学習の提出率は非常に高かった。単位を修得した57名の学生について調べると、課題の提出率は 99.2%に上った。(資料 14)また、学生の授業評価の自由記述においても「一番好きな授業でした！英語メディア学科に入学してよかったと思いました。映画の見方が広がって、プライベートでも活用できるし話題にもなります。歴史は苦手なのですが映画の技術と歴史を沿って勉強すると、歴史も面白いと感じました。中学や高校の時にこういった勉強ができていたらもっと呑み込めた気がします。たのしくて面白い授業をありがとうございました！」という意見や「趣味の映画を専門的に分析して、社会情勢がわかったので楽しかったです。授業内での学びを今後の鑑賞に役立てます」といった意見が見られた(資料 15)。いずれも授業内での映画についての学びを、高校までの学習や趣味、社会情勢といった授業外の知識や体験と関連付けて評価する視点が生まれており、授業において意図したことが一定程度理解されていると評価できるのではないだろうか。

(b) ボーナス課題の提示

学期末のボーナス課題については、別途加点の対象となったこともあって多くの学生が利用した。(資料 16)その中でほとんどの学生は授業で扱ったものとは異なる映画について独自の分析や調査を行っており、授業での学びをさらに開き、深めるという意図は一定程度達成したと評価できるのではないだろうか。

4-2. 主体的な学びの実践

(a) 授業用スライドの編集と電子ファイル化

シネマ英語において授業用のスライドをファイル化したものへのアクセスログは以下のとおりである。

課題番号	1	2	3	4	5	6	7	8
アクセス数	77	76	84	59	80	60	54	37

受講者数 35 名に対して、アクセス数が大きく上回っているのは試験前に再度ダウンロードするなど一人で複数回アクセスしたものがいたからである。授業回数によってアクセス数にバラつきがある理由は明らかではないが、ファイルの公開日から授業までの日数なども関係するのではないかと思われる。いずれにしても大多数の学生が利用していることが見え、授業前に想定した意図はある程

度達成されたと評価できるのではないだろうか。

(b) 学生による試験問題の作成

毎回寄せられた多くの問題の中から実際に試験問題として利用した。その問題を資料として添付している。その部分の正答率とほかの部分の正答率の差などについては検討していない。

(c) 学生の意見のLMSでの聴取と掲示

映画メディア研究の授業内でLMSを通じた意見聴取を行ったが、その一覧を授業内でリアルタイムで提示した。

姓 名	3本に共通する点は何でしょうか	これらの映画からどんな印象を受けましたか	これらの映画と30年代のハリウッド黄金時代の映画や映画観望とのかわりは何ですか	回答日時
	殺人事件が絡んでいる	暗くて重い話	夢や希望のある話ではなくて殺人があつてそれを説明して行くという感じになった	2014/07/25 17:12
	追求	規制が厳しい	詳しくなかった	2014/07/25 17:22
	人が殺されているところ	色んなことが複雑に絡まってやがてという印象を受けた	規制を守るために、探偵が主人公であるミスリンが殺される点で規制を破っているが、人が死ぬ瞬間は隠されていなくて見えない	2014/07/25 17:19
	最初に事件が起って後から真相が分かるというストーリーの流れになっている。	謎のアンボが早い、内容が面白い	30年代からヘイズコードができたため、事件や犯罪や犯罪がなかった	2014/07/25 17:14
	殺人	最初は内容が面白い最後が気になる	30年代からヘイズコードができたため、事件や犯罪や犯罪がなかった	2014/07/25 17:15
	全体的に映画が面白い理由が追求していく	最初の内容が面白い最後の内容が面白くなる	事件や犯罪や犯罪がなかった	2014/07/25 17:15
	殺人があったこと	画面が暗く面白	殺されるシーンがなかった	2014/07/25 17:20
	殺人事件	ある	規制が守られているところと守られていないところがある	2014/07/25 17:20
	殺人事件、探偵	人が殺されるシーンが映らない	規制が厳しい	2014/07/25 17:19
	男女同士の描写	事件や探偵といった二人だけの空間が強い印象を残した	シリアスで明るくない、人が死ぬ瞬間などは写っていないことなど	2014/07/25 17:17
	殺人事件、白黒	不思議な感じが気になる	規制がかかっている	2014/07/25 17:13
	殺人事件、白黒	続きが気になる、ミステリアス	ミスリンがあまり叫び声があつていて規制が厳しかったのが分かった	2014/07/25 17:14
	殺人事件、白黒	不思議、続きが気になる	死体や血がなかった、死ぬ瞬間が写ってなかった	2014/07/25 17:13
	謎解き	ミスリンが入るシーンが多かった、男性中心の映画だった	人が死ぬシーンで足しか見えないうちにミスリンは規制されていなかった、ヘイズコードが守られていた	2014/07/25 17:16
	探偵、殺人	暗く、どんよりとした印象を受けた	人の死ぬシーンや過激なシーンが撮られてなく、足だけなど映像が規制された	2014/07/25 17:18
	殺人事件でその真相もあはく映画	女の入り男の人が驚いイメージ	殺人ものたりと血や殺される場面などの映像はなかった	2014/07/25 17:19
	殺人	幸せな映画といえない内容	殺されるシーンは映さない	2014/07/25 17:10
	殺人	最初に内容が詰まっているため最後が気になる	30年代からヘイズコードが出来たため、事件や犯罪や犯罪の場面が省略されていた	2014/07/25 17:15
	全体的に映画が面白い、探偵とか刑罰的な、ミステリアスなイメージの言葉が多く使われている。	暗い話で話のアンボが早い、全体的に暗い	殺人のシーンは足だけ映して、ヘイズコードを守っているが、殺人現場を題材にしている時点で、ヘイズコードを破っている	2014/07/25 17:14
	殺人事件	全体の雰囲気暗く面白かった	アップシーンや殺害シーンがほぼない	2014/07/25 17:21
	殺人事件があったこと	口分で話さくみとっていかないといけないところがある	人が殺されるシーンがなかった	2014/07/25 17:19
	主人公が最初、いなくなる	マリリン・シロ・のときも今日の映画でもやがてがヘイズコードを本気で守るという感じがしない	マリリン・シロ・のときも今日の映画でもやがてがヘイズコードを本気で守るという感じがしない	2014/07/25 17:14
	女の人が無差別になっている	昔の映画は自分の身近にいる人が被害になっているシーンが多いという印象	オソンの人が隠されていそうなシーンがヘイズコードに違反している感じがする	2014/07/25 17:14
	事件が起きてそれを主人公が追っていく	主人公はみんな男であり、女を相手に扱っている	殺された人の死ぬ瞬間や探偵瞬間が映されていない	2014/07/25 17:14
	謎が解かれる	事件を解明していく中で見ている人も一緒に処理できる	死ぬ瞬間のシーンを映さない	2014/07/25 17:15
	オカルト、探偵、白黒	怖い、恐怖感	規制がかかっている、怖い	2014/07/25 17:19

このように多くの意見聴取が可能となり、授業前の意図は一定程度達成されたと評価できると考える。またこのように複数の意見を匿名で示すことで議論も活発化したと考える。

4-3. 他者との協働作業

(a) グループ学習やペアワークの実践

映画メディア研究において導入したグループ学習については、次のような授業評価の意見があった。「毎回映画をいつもと違う視点で見ることができたこと、いろいろな視点を周りと共有できたこと、先生の考え方を知れたことでアメリカ文化、映画についてより深い知識を得ることができた。最後のアナ雪は全く映画を見ていなくても分かる内容で、幸せとは何かを考えながら見てみようと思った。」(資料 15) 視点の共有を肯定的成果ととらえており、授業前の意図が達成できていると評価できる。またすでに述べたとおり、授業前課題の提出率が非常に高かったのも、グループで成果を共有させ

た成果と考えることができるのではないだろうか。

(b) コメンテーター制度

資料に添付したように、後期の初回の授業の中で学生にはコメンテーターの役割を説明したうえで発表者とコメンテーターのペアを作るように指導した。資料に添付のとおり、ペアを作り、授業の内外でペアによる作業を行った。ペアワークがどの程度実効性を持ったのかについては評価していない。

(c) 相互評価

資料に添付したような評価シートを作り、評価を行わせた。学生には自身の発表を改善するうえでピアからの評価コメントを参考にするように指示を行い、すべて当該の学生に渡している。それがどの程度発表に生かされたのかについては調査を行っていない。

4-4. 授業外学習の促進

平成 26 年度の授業評価アンケートにおいて、1 週間の授業外学習時間については一定の改善を見た。映画メディア研究における授業外学習の変化割合は以下の通りであった。(資料 17)

授業外学習時間の変化

	0 時間	1 時間未満	1～2 時間	2～3 時間	それ以上
平成 25 年度	69%	25%	6%	0%	0%
平成 26 年度	18%	50%	25%	7%	0%

ここにも明らかなように、授業外学習時間を増やすという目的は一定程度達成されていることがわかる。

(a) 授業外学習の点数化

資料添付のように、授業外学習が学習の一部として配点を持っていることをシラバスに明記し、学生にもその旨説明した。映画メディア研究の課題提出率が非常に高い理由をここにも見つけることができるだろう。

(b) LMS を活用した自習教材の配布

シネマ英語において作成した自習教材のアクセス数は以下のとおりである。

課題番号	1	2	3	4	5	6
アクセス数	143	86	90	100	100	58

このように受講生総数 35 を上回るアクセスが確認できる。学生がどのような使い方をしているのかについては調査していないが、それを検討すればどうしてこうしたアクセス数になるかが説明できるのではないだろうか。

(c) 予習課題、復習課題の電子書籍化

映画メディア研究において作成した授業外課題の利用者は以下のとおりである。

番号	アクセス数
1	79
2	86

受講生総数 67 人から考えると、複数回アクセスした学生を差し引いても多くの学生が予習・復習の課題である電子書籍を利用したことがうかがえる。

しかし、この中から授業後に課題を提出した学生数は

番号	提出者数	提出率
1	11	14%
2	15	17%

となる。授業の復習には活用しても、発展課題を行うとまではいかないところが今後の課題であろう。

ここまで述べてきたように、授業の中で取り組んできたものについては一定程度の成果を上げたものが多かったと考える。今後もこうした努力を続けていながら、更なる改善を続けていくことが必要と考える。

5. 今後の目標

この項ではこれまでの成果を踏まえて、今後の検討課題を挙げる。ここでは今後の3年程度を見越した短期的な改善点をあげる。

1. 取り組みの精査と選択

主に授業が学習時間の向上に向けて様々な取り組みを行ってきたが、それらの効果を再検討し、授業の目的や理念に応じて取捨選択する必要があると考える。たとえば映画メディア研究は様々な取り組みを行っているが、その結果講義を行う時間が減り、授業外学習分を控除しても授業の進捗度合は以前とあまり変わらない。それらの取り組みを再検討したうえで、学生に集中して授業を聞かせる時間を増加したいと考える。

2. 授業外課題の充実

授業外の課題の電子書籍化を進めてきたが、準備作業が追い付かず、すべての項目でそれを準備することはできなかった。一定の学習効果は認められるので、今後より質量において充実させていきたいと考える。

3. 成果指標の再検討

今回様々な取り組みについて検討した際、エビデンスデータの不十分さを感じる場所が多かった。特に卒業ゼミナールにおけるペアワークや相互評価について学生の達成度を測るためのエビデンスデータを増やしていく必要があると考える。

4. 汎用的な授業モデルの構築

今回成果を上げたと考えられる取り組みについては、より汎用的なものとして利用可能なモデルを構築していきたい。特に授業外学習時間の増加については本学喫緊の課題と考えられるので、2015年度中にモデル作成を行いたいと考える。

さらにより長期的な展望による改善点や教育目標をあげる。

長期的には現在取り組んでいる学生のより能動的な授業参加を導く教育方法の追及をさらに推し進めていきたいと考える。「大学は学生が自分の意志で自分の責任で学ぶところである」というのは多くの大学教員が抱いている神話であるが、大学進学率が60%を超えたユニバーサル時代の今日においてそれは単なる幻想でしかない。その幻想を幻想で終わらせないためには、まず我々自身が自分を、自分の教育を見直していく必要があるのではないだろうか。我々が教育を教室内で完結するものとせず、学生の能動的な学びを引き出す教育を行ったとき、はじめて大学に関する幻想は理想に代わるのだと考える。

Appendix. 添付資料一覧

1. 平成 25 年度授業評価アンケート結果
2. 2015 年度映画メディア研究シラバス
3. 2015 年度シネマ英語シラバス
4. 2015 年度卒業ゼミナール I、II シラバス
5. 平成 26 年度映画メディア研究授業前課題サンプル
6. 平成 26 年度映画メディア研究レポート課題
7. 平成 25 年シネマ英語レポート課題
8. 平成 26 年シネマ英語授業用スライドサンプル
9. 平成 25 年度映画メディア研究定期試験問題
10. 平成 26 年度卒業ゼミナール発表題目およびコメント一覧
11. 平成 26 年度卒業ゼミナールコメントの役割について
12. 平成 26 年度卒業ゼミナール相互評価用紙
13. 平成 26 年度シネマ英語ミニテストサンプル
14. 平成26年度映画メディア研究授業前課題提出状況
15. 平成26年度映画メディア研究授業評価自由記述欄
16. 平成26年度学期末レポート提出状況
17. 平成26年度映画メディア研究授業評価
18. 平成26年度シネマ英語授業評価
19. 平成 25 年度シネマ英語授業評価